

2.1 古代ギリシアの思想

2.1.1 神話から哲学へ

ΜΥΘΟΣ ミュトス から ΛΟΓΟΣ ロゴスへ

- ：（ ） 的世界観：すべてを「神話」で説明
 ⇒ （ ） 的世界観：すべてを「言葉・論理・理性」で説明
- ・（ ） 英 myth）：原始人・古代人・未開社会人などによって伝えられた、神聖さを帯びた物語。太古に起こったとされる一連のできごとに関する物語によって、宇宙の起源、超自然の存在の系譜、民族の太古の歴史物語などを説明する。
 - ・ギリシア神話：主神（ ）ほかオリュンポスの神々や、英雄をはじめとする人間との物語。ホメロスやヘシオドスの叙事詩のほか、多くの詩や戯曲として残されている → 資 p.22
 - ホメロス 『（ ）』：トロヤ戦争アキレウスの活躍, cf. パリスの審判
 - 『オデュッセイア』：英雄オデュッセウスの冒険談
 - （ ） 『（ ）』：宇宙の誕生、神々の系譜
 - 『仕事(労働)と日々』：日々の労働と正義の尊重
 - ・（ ） 混沌 ⇒ （ ） 秩序・調和・宇宙・世界
 cf. 英 cosmetic （ ） ← 女性が服飾や化粧で装いを凝らした状態、軍隊や社会の規律や秩序
 - ・（ ）：「言葉・論理・理性・理由・秩序・理法」を意味するギリシア語

哲学の語源

- ：希 φιλοσοφία (philosophia) ⇒ 英 () ⇒ 希哲学 (西周の訳) ⇒ 哲学
phileo = 愛する + sophia = 知恵 ⇒ 知恵を愛すること
 cf. ヒロポン、ソフィーの世界, Sophia University ← 聖母連祷: Sedes sapientiae = Seat of wisdom
 : 哲学とは学問が未分化の時代には学問の総合的な呼び名だった。
- （ ） ・ 希 theoria）：実用でも娯楽でもなく純粋に事柄をそれ自体として眺めて真相を究明しようとする知的態度（アリストテレスは知的欲求を人間の本性に根ざすとした）
 ⇒ theory cf. 資料編 p.4

Q. 古代ギリシアで重要視されたのはどちら？ 理論知 ↔ 実践知

古代ギリシアの（ ）哲学

：前6世紀頃小アジアのイオニア植民都市ミレトスに始まる**自然現象の根本的原理を探求する学問**。
神話的思考からの脱却，ただ理性によってのみ世界を理解しようとする合理的思考の始まり。

⇒万物の根源・始源〈原初的要素〉（ $\alpha \rho \chi \eta$ ）を探求

・（ ）：思いこみ ⇒ （ ）：真の知

Q. なぜ哲学がギリシア本土ではなく小アジアの植民都市で誕生したのか？

[背景] 地中海交易による商業の発達 ⇒ ①文化の多様性による自由な気風 ②オリエント文明の知的刺激
③富裕市民にスコレー（暇） ④貨幣経済の浸透による抽象的思考の発達

■ 自然哲学者たち

・イオニア（ミレトス）学派

（ ）：「万物の根源は（ ）である」「哲学（愛知）の祖」（いずれもアリストテレス『形而上学』による）「万物は神々に満ちている」七賢人の筆頭

（ ）：アルケーは「ト・アペイロン（無限《定》なもの）」

（ ）：アルケーは「空気」

・エレア学派

（ ）：「有るものはあり，有らぬものはない」

「あるものは不生にして不滅，全体にして唯一，また不動にして完全なり」（断片 8）

⇒生成変化・運動の否定，永遠の同一性をもった唯一の存在

（ ）：パラドックス ex.アキレウスは亀を追い越せない

⇒運動の不可能性を証明しようとした

paradox

1.逆説,パラドックス.2.矛盾した[道理に合わぬ]言葉,へ理屈;矛盾した(ようにみえる)人[事物,事態].
語源:ラテン語より,もとはギリシア語 paradoxon(para-並んで+doxon 意見=定説と相反する意見).

・その他

ヘラクレイトス：「永遠の火」「（ ）希 panta rhei）」

「同じ川に二度と足を踏み入れることはできない」

「（ ）は万物の父，万物の王なり」（断片 53）

⇒対立するものを結合し万物を統一する理法としてのロゴス，

※ ヘーゲルはヘラクレイトスを弁証法の祖と呼んだ

（ ）：万物の原理は「数」。知恵の探求が魂の神的本性を回復させる。

ピュタゴラスによれば，魂は元来，不死すなわち神的な存在であるが，無知ゆえにみずからを汚し，その罪をつぐなうために**肉体という墓**に埋葬されている。われわれが生と呼んでいる地上の生活は，実は魂の死にほかならず，その死から復活し，再び神的本性を回復することが人生の目的である。それに失敗して無知な人生を繰り返すと，輪廻転生の輪から永久に脱け出せない。この苦しみから解放されるには魂は知恵(ソフィア)を求め，それによって本来の純粹存在に立ち帰らなければならない。〈知恵の探求(フィロソフィア)〉こそ，解脱(げだつ)のための最も有力な方法なのである。
『世界大百科事典』平凡社)

＝ピュタゴラス教団：哲学・音楽・天文学・数学的宗教教団

⇒プラトン哲学，近代自然科学へ影響与えた

- () : 「火」「水」「土(地)」「風(空気)」の四元素と「愛(結合)」「憎(分離)」
二つの力(パルメニデスの説に従い無からの生成と無への消滅と空虚を否定)
- () : 「原子(希 atoma, 英 atom : これ以上分割できないもの)」原子論
形・大きさ・位置のみ差のある不生不滅で限りなく多数の原子 atoma が, 空虚(真空) kenon の中で機械的に集合離散の運動をして世界が生じる
⇒唯物論¹の祖
- () (φύσις physis) : 自然, 本性。ギリシア哲学におけるこの語の最古の用例はヘラクレイトスの断片に見ることができるが, それによれば, 〈もの〉の〈本来あるがままの姿〉〈真実あるがまま〉を意味する。したがって本性, 本質などと訳されたりもするが, ギリシア哲学全体において示されるこの語の意味の複雑さを考えると, 〈自然〉が最も適切な訳語である。⇒physics ()
- () (ἀρχή arche) : ギリシア語で, 始まり, 起源を意味する語。はじめイオニア学派の哲学者たちの間で, 宇宙万有が生成してくるところの, 〈原初的要素〉の意味に用いられた。この意味ではじめてこの語を用いたのはアナクシマンドロスとされている。
⇒archaeology

自然哲学の中にみられる二つの立場

1. 「生成」: 生成消滅変化運動する自然が万物の実相
2. 「存在」: 自然の背後にある不消不滅不変不動の存在が万物の実相

¹世界の根本的原理ないし実在を物質とみなす立場(←唯心論, 観念論: 世界の根本原理・実在を精神あるいは精神的なものとする)

2.1.2 ソフィストとソクラテス

ソフィスト sophist 希 sophistes 〈達人〉・〈知恵のある者〉

：古代ギリシアに前5世紀中ごろからあらわれた、若者たちに知識を授けて謝礼を受けとる職業的教師たち→後に《詭弁家》(sophism=詭弁：こじつけの屁理屈)の意味になる

【ソフィストの教授内容】

() = 〈徳〉：人間としてもポリスの一員としてもすぐれた人物となるため

() レトリケー：社会的成功を得るためにさまざまな場で人々を説得できる能力

【ソフィストの主張】

正義・善・美などの価値判断に絶対的な基準はなく、その基準は人間によって決められた相対的なノモス(nomos 慣習, 法律)である。

←→ ソクラテスの主張：価値の基準はフュシス(physis 自然)によって決まっている絶対的なものである。⇒後に自然法概念が成立

・プロタゴラス Protagoras (前490頃～前420頃)

「万物の尺度は()である。」

相対主義：あらゆる真理、規範、価値が、個人の主観や特定社会集団にだけ通用するとし、唯一絶対の真理や規範、価値を否定して、認識・知識・価値等の相対性を主張する立場

・() (前500or484～前391or375) 弁論術の大成者

「何も存在しない。存在しても知ることができない。知ることができたとしても人に伝えることができない。」

= () 主義：人間は普遍的な真理を確実にとらえることは不可能だとする立場

※相対主義と懐疑主義 ⇒ 無道徳主義の傾向

ソクラテス

Sokrates (前470or469～前399)：著作は残さなかった。弟子プラトンの対話篇『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』『饗宴』などに描かれる。ソフィストの主張と活動に対する反対者。

デルフォイのアポロン神殿の神託：「ソクラテス以上の知者はいない」

⇒知恵があるという自覚はないが、神が嘘をつくはずがないと考えたソクラテスは、神託の意味を解明するためにアテネ中の賢者をたずね歩く

・知者と呼ばれる人たち：() のことがらについて何も知らないのに知っていると思い込んでいる

・ソクラテス：() =自分の知らないことは知らないと自覚している

⇒神託の真意＝「すべての人間の無知を悟らせること」(ドクサ《思いこみ》からの解放)であるとソクラテスは考えた

真の知恵の探求のための方法(神命として市民の無知の自覚を悟らせることを自らに課す)

() 希 dialectike)：対話により相手の無知を自覚させる

産婆術(助産術)：自分で考え、発見させる教育原理(→資 p.26 問答法)

皮肉法(エイロネイア) Socratic irony：無知をよそおう問答法で真の知に導く

■ 魂（ ）への配慮（世話）としての知の追究……吟味と反駁の実践

「魂＝精神をできるだけすぐれたものにする」：ソクラテスにとっての最高の価値《知への愛》

「大切にしなければならないのは、ただ生きるということではなくて、（ ）ということなのだ。」『クリトン』48b （←金銭、評判、名誉、肉体などではなく！）

「（ ）を知れ」（gnothi seauton）：デルポイのアポロン神殿に掲げられた碑銘の一つ。
ソクラテスはこの言葉を自らの標語として、ディアレクティケーを通して無知の自覚から始めて、よく生きるための知恵を追究した。

■ 徳・知・福

アレテー arete：徳、卓越性 ex)馬のアレテー：速く走ること

・「徳は（ ）である」：知徳合一，知行合一

→（ ）主義：正しい知恵こそが正しい行動をもたらす。

「人間にとっては、徳その他のことについて、毎日談論するということが、まさに最大の善きこととなっているのであって、わたしがそれらについて、問答しながら、自分と他人とを吟味しているのを、諸君は聞いておられるわけである。これに反して、（ ）のない生活というものは、人間の生きる生活ではないのだ。」（『ソクラテスの弁明』38a）

「正しいこと、その他、およそ徳にもとづいて行為されるところのものは、いずれも善美なものである。そしてこの善美なるものを知っている者は、これをさしおいて、他のものを選択することはないが、これを知らない者は、そのような善美のおこないはできない。すなわち（ ）の行いをなし得るのは、智者だけである。」（クセノポン『ソクラテスの思い出』）

・福徳一致：よく生きること、つまり知を愛し求め続けることこそが幸福な生き方である。

ソクラテスの死

ソクラテスが青年に害悪を与え、国家の神々を認めず、新奇な神霊（ダイモニオン；資 p.24）を持ち込んでいるという理由で告訴される

⇒法廷で自らの無罪を主張（『ソクラテスの弁明』）

⇒有罪，死刑の判決，約30日間弟子たちと獄内で過ごす

⇒友人，弟子たちの脱獄のすすめを断り（『クリトン』），毒杯をあおいで処刑される

Text ソクラテスが脱獄を拒否した理由

プラトン，田中美知太郎訳『クリトン』中央公論社，世界の名著6より

「おまえは賢すぎて、忘れてしまったのかね？ 母よりも、父よりも、その他の祖先のすべてよりも、祖国は尊いもの、おごそかなもの、聖なるものだということを。…もし何かを受けることが指令されたなら、静かにそれを受けなければならないのだ。打たれることであれ、縛られることであれ、戦争につれて行かれて傷ついたり死んだりするかもしれないことであっても、その通りにしなければならないのだ。正しさとは、この場合、そういうことなのだ。そして、そこからしりぞいても、ひいてもいけないのであって、持ち場を放棄することは許されないのだ。むしろ、戦場においても、法廷においても、どんな場所においても、国家と祖国が命ずる何でもしなければならぬのだ。さもなくば、この場合の正しさが、当然それを許すような仕方では、祖国を説得しなければならないのだ。」

2.1.3 プラトン

プラトン Platon 前 428or427 - 前 348or347

：古代ギリシアの大哲学者。アテナイの名門の生まれ。ソクラテスの弟子。師の死後各地を旅行した後、アテナイに戻り自分の理想と目的にかなった人材の養成をめざし、アテナイ西北部に学園（ ）＊を開く。経験的世界を超えて存在する（ ）を真実とし、想起によりイデアにいたろうとする**観念論・理想主義哲学** (idealism) を樹立。また、哲学者（哲人王）の統治する理想国家を説く。著書は『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』『饗宴』『国家』『テアイテトス』など約三〇編の**対話篇**。

＊この学園の入口に「幾何学に通ぜざるものは何人も入るべからず」との文字が彫られていたという逸話もある。

イデア論 (idealism ⇒和訳：観念論, 理想主義)

() 希 idea (姿, 形) ←希 idein (見る)

：非物質的で永遠不変の**真の実在**。人間の知覚によっては知ることができず、純粋な思考のみによって把握される**事物の本質**。哲学者の求める知の対象。

ex.) 三角形

なぜ形の違う右の図形を

同じ三角形であると認識できるのか？

⇒ 私たちは三角形のイデア（本質）を知っているから。

cf.) 三角形の定義：1直線上にない3点 A,B,C があるとき、三つの線分 AB,BC,CA でできる図形を三角形という。



ex.) 「美」とは何か？

夕焼けは美しい。桜の花は美しい。"ローマの休日"のオードリー・ヘップバーンは美しい。etc.

……これらは不完全で一時的なものに過ぎない

⇒永遠に変化しない完全な本質「**美そのもの**」＝**美のイデア** がイデア界に存在し、現実界において、美のイデアを**分有**するものが美しく知覚される。

・現実界とイデア界の（ ）論 dualism (cf.→キリスト教の神の国と地上の国)

イデア界 (永遠不滅の普遍的存在)

↑ () ↓ ()

現象界 (不完全な個々の存在)

人間 = 肉体 (現象界) + 魂 (イデア界) 「肉体は魂の牢獄」

Cf.

哲学は「死の練習」：できるだけ魂を肉体から分離解放し、イデアの似像とすること

「() のイデアこそ、学び知るべき最大なるものだ」(『国家』505a)

：あらゆる知と真実の原因。太陽にたとえられるイデアの頂点。「**イデアのイデア**」

エロース

エロス 希 eros 羅 cupido (クピドー→キューピッド)

:ギリシア神話の愛の神。⇒ 不完全な人間が完全で価値のあるアイデアを求める愛

cf. エロース: 自己に欠けたものへの愛, 上昇の愛

←→ (): キリスト教的な無条件に与える下降の愛

羅 caritas カリタス ⇒ 英 charity, cherish

cf. プラトニック・ラブ: 精神的な恋愛。肉欲を離れた恋愛。(1988)『国語大辞典』小学館

(): アナムネーシス

: 人間がアイデアを認識できるのは、かつて人間の魂はアイデア界に住んでいたからであり、その時の記憶を思い出す＝想起することによって、美そのものや善そのものを探求することができる。

◆洞窟の比喻◆ 資 p.31『国家』(第7巻1章 514-518b)

以上のようなアイデア論から見ると、多くの人々の生き方は、本来のあり方とは逆転していることになる。感覚を通じて出会う対象は、真の実在であるアイデアのいわば映像や写しにすぎないのに、それを事物の真の姿だと思いこんでいるからである。プラトンは、このような人々のありさまを洞窟の中にとらわれている囚人のようにたとえた。本物の姿を見たこともなく、壁に映る影絵を見て、それを唯一の実在と思いこんでいるようなものである。人々に本来求められるのは、洞窟から抜け出して、明るい陽光の中で事物の真の姿を見てとることである。そのためには、魂の全面的な方向転換（ものの見方を完全に变えること）が必要であるとプラトンは主張した。『高等学校倫理』第一学習社教科書より引用

魂の三部分説・四元徳・国家論の対応

人間の魂（プシュケー）	四元徳	理想国家
()	()	統治者階級（哲人）
気概（意志）	()	防衛者階級（ ）
欲望（情欲）	()	生産者階級（庶民）

※ + (): 三つの徳の調和としての徳

「二頭立ての戦車」のたとえ⇒資 p.30 御者（理性）が二頭の馬（気概と欲望）をコントロールする

国家論

() 政治: 哲学者が王となるか、王が哲学することが政治の理想

個々の人間の魂と国家の相似性 ⇒ 「よく生きる」ことを国家でも実現するためには「善」を求める哲学者が国家の統治者とならなければならない。

「哲学者たちが国々において王となるのでないかぎり、あるいは、今日王とよばれ、権力者とよばれている人たちが、真実に、かつじゅうぶんに哲学するのでないかぎり、つまり、政治的権力と哲学的精神とが一体化されて、多くの人々の素質が現在のようにこの二つのどちらかの方向に別々にすすむことを強制的に禁止されるのでないかぎり、親愛なるグラウコンよ、国々にとっての不幸のやむことはないし、また、人類にとっても同様だと僕は思う。」『国家』(473d)

◆『国家』他の特色: 民主制（デモクラティア）: 自由と平等の名の下欲望が解放され、あらゆる非行と不道徳が保護される。哲人政治における統治者階級…教育と職務における男女平等・妻子の共有・優生思想

2.1.4 アリストテレス

アリストテレス Aristoteles 前 384～322

：古代ギリシアの哲学者。**万学の祖**。プラトンの弟子ではあるが、イデア論を批判²した（**現実主義**）。前 342 年、マケドニア王に招かれ王子アレクサンドロスの家庭教師をした。その後、アテナイ郊外に（ ）という学園を開き、散歩道を歩きながら講義したということから（ ）＝逍遥）学派とよばれた。主著は『オルガノン』※「道具」の意、『自然学』『形而上学（けいじじょうがく）』『ニコマコス倫理学』『政治学』など。

学問の区分

1. （ ）学：自然学，数学，第一哲学（形而上学・神学） 「見ること」
 2. **実践学** ：倫理学，政治学 「行うこと」
 3. **制作学** ：弁論術，詩学 「作ること」
- +オルガノン（道具）：論理学 「理論学の予備学科」

ex.) 三段論法：すべての M は P であり，すべての S は M であれば，すべての S は P である）
 といった種類の論理形式を扱うもの，M, P, S には〈人〉とか〈動物〉のような名
 辞が代入される（名辞論理学）

※理論的＝テオーリア theoria 的＝観想的＝観察研究的

アリストテレスの形而上学・第一哲学

- ・形而上学 希 metaphysica → 英 metaphysics

：事物の本質，存在の根本原理を思惟や直観によって研究する学問

→アリストテレスは「第一哲学」「神学」と呼び，存在を存在として普遍的に研究する学問であるとともに，運動の根拠としての神について考察する学問だった。

- ・アリストテレスのイデア論批判

プラトン：真実在＝イデア＝感覚の世界の個々の物を越えた永遠，普遍の存在

アリストテレス：第一実体（**ウーシア ousia**）＝感覚で経験される個物，

→本質（形相：エイドス）は個物から離れることはなく内在する

- ・エイドスとヒュレー：→存在する物＝実体を静的に説明する

実体（ウーシア）ousia：運動変化する個物 形相＋質料 ex.)西郷隆盛の銅像

（ ）eidos：個物に内在する普遍の本質，形式

「何であるか」 ex.)犬を連れた人の姿

（ ）hyle：物質の素材，内容

「何からできているか」 ex.)青銅

- ・可能態と現実態：→実体の変化を説明する

（ ）dynamis：**質料**が一定の形相を実現する可能性をもった状態

ex.)木材，オタマジャクシ

（ ）energeia：変化・運動の結果・目的としての**形相**，可能性の実現された状態

ex.)机，カエル

² 「プラトンは愛すべき友である，だがより以上に愛すべきは真理」（『ニコマコス倫理学』1-6）

アリストテレスの倫理学（『ニコマコス倫理学』より）

- ・人間の目的＝善 ⇒ 最高善（あらゆる善のうちで最上のもの）＝（ eudaimonia）
- ・幸福を求める生活形態の区分 ← 「幸福とは何か」ということについては多くの考えがある
 - 享楽的生活：快楽を善とする —— 低俗な人々にとっての善・幸福
 - 政治的生活：名誉を善とする —— 自分が善い人間であることを信じていたい人にとっての……
 - （ ）的生活：真理の認識を善とする → 最高の善，幸福の達成

「人間というものの善」とは、人間の卓越性（アレテー）に即しての、たまたしその卓越性が幾つかあるときは最も善き最も究極的な卓越性に即しての魂の活動であることとなる。

・二種類の徳

- A （ ）的徳（理性の領域）
1. 知恵：真理を認識する
 2. （ ）・フロネーシス phronesis：欲望・感情の抑制，（ ）を命じる
- ※中庸・メソテース mesotes：過度と不足の両極端を避ける
- B （ ）・倫理的*徳（欲望・感情の領域） *エートス＝習性＝倫理
1. 勇気：無謀と臆病の中庸
 2. 節制：放縦と無感覚の中庸
 3. おおよう（寛仁）：浪費とけちの中庸
 4. 機知：道化とやぼの中庸
 5. 友愛
 6. 正義
 - … etc.

・ポリス（国家，共同体）の倫理

「人間は（ ），＝（ ， ， ）的動物である」（『政治学』）

正義 dikaion

A 全般（全体）的正義

：ポリスの法秩序を守ること

B 部分的正義

：財貨の分配や交換に関する公正

1. （ ）（分配）的正義

：名誉や利益が個人の地位，能力に応じて分配

2. （ ）（矯正）的正義

：裁判などにおける各人の利害・損得の均等な調整

cf. 垂直的公平(1)と水平的公平 (2)

（ ）・フィリア philia

：相手から得られる利益や快楽のためでなく，友であるがゆえに，友の善き人格のゆえに友を愛すること

Q. 友愛の対象として最も重要なものは？ （善いもの・快適なもの・有用なもの）

※法と正義だけでは調和した社会生活を確保できない→フィリアがあれば正義は不要

・国制（『政治学』より）

正しい国制 [国民共通の利益を目指す]	王制	貴族政治	共和制
道を踏み外した国制	僭主政治 [独裁者の利益]	寡頭政治 [富者の利益]	民主(衆愚)政治 [貧者(無産者)の利益]

2.1.5 ヘレニズム時代の思想

ヘレニズム hellenism

1. ギリシア文化一般の本質にかかわる精神的基盤 (←→ヘブライズム)
2. アレクサンドロス大王以後, 約 300 年間の時代と文化 (前 323 アレクサンドロスの死へ)

ヘレニズム国家

プトレマイオス朝 (), セレウコス朝シリア, アンティゴノス朝マケドニア
= スペインからインドに至るギリシャ風文化の広がり

[アテネ盛期]		[ヘレニズム期]
ポリス (都市国家)	⇒	コスモポリス (世界国家)
市民意識	⇒	コスモポリタン () としての意識
		※ () は万人に共通するという人間観

ヘレニズム期の思想の特徴

- ・ **世界市民主義 cosmopolitanism** : 超都市国家的な社会意識, 理性と愛で結ばれた世界の同胞
- ・ () 主義 **individualism** : 共同体 (ポリス) に依存しない人間の在り方

ストア学派 (禁欲主義) Stoicism

キプロスの () Zenon ho kypiros 前 335~263

: キュニク (犬儒) 派 (資 p.45) やアカデメイアに学び, アゴラの彩色柱廊(ストア・ポイキレ)に学園を開く。

72 歳の頃けがをしたことから, もはや自分の生には価値がないとして自殺したといわれる。

列柱廊 stoa ⇒ ストア学派 the Stoic School

cf. Stoicism = ストア哲学, () 主義

[神的] 理性 (ロゴス): 人間の持つ能力

= 思考・言語の原理

= 世界・自然の () kosmos = 〈神の火〉〈運命〉

= 倫理的価値の包括的原理

人生の目的: 自然の秩序に則って生きる = 宇宙と一体化する ⇒ 最大の幸福

・ 「() に従って生きよ」 = 「理性に従って生きよ」

・ () pathos : 非理性的な感情。意欲。欲念, 恐怖, 快, 苦など

⇒ パトスのない状態 () 不動心, 無情念 希 apatheia 羅 niladmirari

ストア的倫理: 情念や思惑にかき乱されず, 厳しい克己心と義務感を身につけてこの世を正しく理性的に生きる

cf. ローマ帝国時代のストア派

(): 帝政初期のストア派哲学者, 劇作家, 政治家。ネロ帝の家庭教師。

(): ギリシア人哲学者。奴隷の子として成長。主人は向学心を認め, ストア哲学者に弟子入りさせ, 後に解放した。

(): 五賢帝の一人。著書『自省録』など

エピクロス学派 Epicureanism (快楽主義)

エピクロス Epikuros 前 341 頃～270 頃

: 原子論, () 主義で知られるサモス島生まれの哲学者。

人間の死＝生命なき原子への解体 ∴ 死後の世界を恐れて不安に苦しむ必要がない

「われわれが存在する限り () は現に存在せず, () が現に存在するときには, もはや我々は存在しない。」 エピクロス『メノイケウスへの手紙』より

快楽主義 hedonism : 心身の快楽こそが人生の目的, 第一の善。

「()こそは幸福なる生活の始めにして終わりなのである」

真の快楽とは？

後で苦痛をもたらす一時的な快楽 ex. ぜいたくな食事, 性的享楽 ⇒ false

健康で質素な共同生活を通して得られる静かな精神的快楽 ⇒ true

(ataraxia) : 心 (魂) の平静な状態

「君にとっては, 藁の寝床のうえに寝ていても平然としていられる方が, 黄金づくりの寝台とぜいたくな食卓とをもちながら, 平静が乱されているよりも, よりよいことだ。」

「 Lathe biosas ラテ・ビオーサス」

: 公的な生活のなかにある煩わしさ (taraxia) から離れた生き方

「われわれは, 日常の私事や国事の牢獄から, われわれ自身を解放すべきである。」

新プラトン主義

: 後 3 世紀ローマ時代, () によって創始される。著書は『エンネアデス』

世界は 3 つの原理的な力と物質界からなるとする。究極の原理である一者 (ト・ヘン) から知性 (ヌース) が流出し, 知性から魂 (プシュケー) が流出し, 魂が生物や物的世界を構成する。人間は内的世界に目を向けることによって, 3 つの原理的な力に触れることができ, 段階を踏んで一者に合一することができるとする。

一者 (ト・ヘン) = 善

流出 ↓ ↑ 合一

知性 (ヌース)

流出 ↓ ↑ 合一

魂 (プシュケー)

【ギリシアにおける哲学】（『世界大百科事典』平凡社、項目「哲学」より）

〈知を愛する(フィロソフエイン philosophēin)〉とは、古代ギリシアにおいて、はじめ、世間ならびに人生についての知恵を愛し求めるという意であった。それは、この言葉の文献上の初出とされるヘロドトスの《歴史》(1巻30節)が伝えるギリシアの賢者ソロン(前7世紀後半～前6世紀前半)の場合である。ソロンは、多くの国々を“知を愛し求めつつ”旅行し視察し遍歴したといわれる。ソロンにとって、人生上、世間上の知恵とは、神々を畏敬し人間の有限性をわきまえるということであった。次いで前6世紀後半以降、ピタゴラス学派において、〈愛知〉は、名利を離れて知を愛求するという意に深められたようである。

これらの考えを受けて、前5世紀後半のソクラテス、およびその弟子プラトンの段階に至って、ギリシアにおける〈愛知〉の意味はほぼ確定した。ソクラテスおよびプラトンによれば、人間にとってたいせつな最も尊いことは、単に生きることではなく、むしろよく生きることである。その場合の〈よさ〉とは何であるか。これを求めることが〈フィロソフィア(愛知)〉である。個人の栄達や富貴、また国家の強盛や栄光は、個人や国家を真に幸福にさせるものではない。それらのものは、個人の所有するものであり、国家の所有するものではあるが、決して個人そのものでも、国家そのものでもない。真実の知恵は、個人そのもの国家そのものが、真によくあることを目指すものでなければならぬ、と。それは今日の言葉でいえば、個人や国家共同体の、精神的主体性の〈よさ〉が求められたということである。〈よさ〉とは、あるべき姿、すなわち善美であること(カロカガティア)であるが、プラトンにおいて、善や美は、〈イデア idea〉あるいは〈エイドス eidos〉とせられた。イデアあるいはエイドスとは、ともに〈見る idein〉という動詞に由来し、〈見られたもの〉を、したがって見られたものの〈かたち(形)〉、あるいは〈すがた(相)〉を意味する。それは、ものの真実の在りよう、在るべき姿を意味する。生成し消滅し流転する多様な存在からなる感性的世界を超えて、不変恒常の〈真実有(ウシア ousia=実体)〉であるイデアが求められ、このイデアとしての善や美を仰ぎ見ながらわれわれの魂を善美にととのえ、またこの世を善く美しく調和あるものとするのが、プラトンにおける〈愛知(哲学)〉の究極の目標であった。アリストテレスが求めたものもまた、真実有としての〈エイドス(形相)〉の探究であった。

このようなギリシアの哲学は、やがて紀元後のローマ時代に、キリスト教がその教理を形成する際に有力な手がかりとなり、教理の中へ採り入れられた。このことによってキリスト教は、ユダヤ民族の一分派宗教であることを超えて、普遍的国際的な宗教となるに至った。こうしてギリシアにおける知への愛=哲学は、キリスト教の一神論によって改竄され、唯一最高の神が有する知への愛となるに至ったのである。